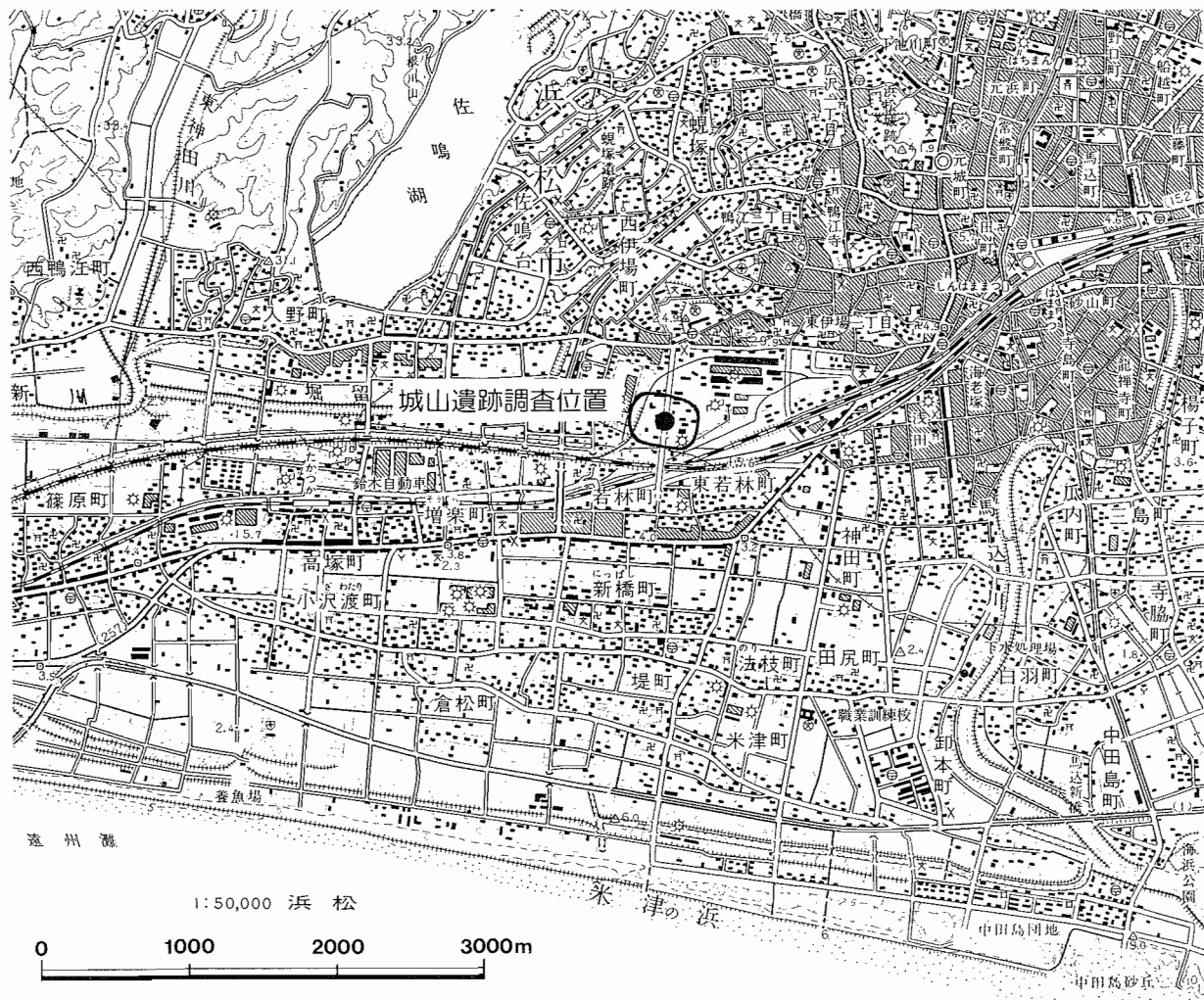


はま まつ し
静岡県浜松市



しろ やま
城 山 遺 跡
(2005)



2005年3月

浜松市教育委員会

例 言

1. 本書はスズキ株式会社南伊場社員寮新築工事に先立ち、静岡県浜松市若林町443-14で実施した城山遺跡の発掘調査報告書である。(教文 第3136号 平成16年11月29日付)
2. 調査に係る費用は、スズキ株式会社が負担した。
3. 調査期間 現地発掘調査 2004年12月9日・2005年2月2日
整理・報告作業 2005年2月～同年3月
4. 調査面積 約82㎡(橋脚部：45㎡, 建物基礎部：37㎡)
5. 調査体制 調査指導機関 浜松市教育委員会(生涯学習部博物館)
調査担当者 鈴木敏則, 村松聡一郎(浜松市博物館)
補助調査員 嶋田育世(浜松市博物館), 清水香枝(浜松市文化協会)
6. 本書に係る整理作業は、清水香枝, 嶋田育世, 藤森紀子, 熊谷洋子が行った。執筆は、鈴木敏則が行った。

1. はじめに

位置と環境 城山遺跡は、浜松市東若林町を中心に若林町・南伊場町にまたがって所在する遺跡である。浜松市南部の海岸平野には、現在の中田島砂丘まで含めて、8条の砂丘列が確認されている。最初に形成された第1砂丘は、三方原台地の直下にあり、現在雄踏街道が通っている。三方原台地の南端が崖面となっているのは、最終氷河期の終わる約1万年前から始まった海水準の上昇に伴う浸食による(海食崖)。約6,000年前をピークとする縄文海進の後、海水面が再び低下し始め、少なくとも第1～3砂丘は5,000年前には形成された。

城山・伊場両遺跡は、第2砂丘上に立地するが、砂丘自体は途切れながら認められているにすぎない。それでも部分的には、標高が3.0mに達する所が存在する。旧東海道が通っている第3砂丘は、南北200m以上・東西8kmに達しており、最も発達した砂丘である。伊場・城山遺跡と同じように、古代～中世の遺跡が多く確認されている。第5砂丘に立地する堤町遺跡からは古墳時代前期に遡る土器が出土していることから、少なくとも4世紀までには第5砂丘まで形成されていたことが分かる。

過去の調査 城山遺跡は、1949年に國學院大学が伊場遺跡に関連して行った試掘調査(第1次調査)により、周知の遺跡となった。1977年には遺跡周辺の市街地化に伴い、埋立工事が計画されたため、同年11月から12月にかけて、旧可美村教育委員会によって範囲確認調査が行われた(第2次調査)。この調査で、木簡・墨書土器・唐三彩陶枕など希有な資料が発見され、一躍脚光を浴びる遺跡となった。それを受け本調査は、1979年と翌1980年に国庫・県補助事業として行われた(第3・4次調査)。

遺跡が所在する可美村は、1991年5月の町村合併により浜松市に帰属したため、遺跡の取扱いについては浜松市教育委員会が行うことになった。1992年4～6月には遊技場(パチンコ店)建設(第5次調査)、1995年8～11月にはスズキ株式会社の社員寮建設(第6次調査)、1999年1～3月にはJR東海の新幹線検修庫新設(第7次調査)、2004年には検修庫内ピット新設('04調査)に先立つ、発掘調査が行われた。また、城山遺跡の北側に近接する梶子遺跡での発掘調査や、市下水道管理設工事の立会調査などにより、城山遺跡の全体像が次第に判明してきた(第1図)。

一連の発掘調査を通して、木簡をはじめ官衙関連遺物を多く出土した伊場大溝は、北西方向にほぼ直線的に伸び、その南側に城山遺跡が、その北側に梶子遺跡が広がっていることがわかってきた。また古代においては城山遺跡は、伊場遺跡の西部地区と連続した遺跡だったことが予想されるに至った。

弥生時代については、砂丘の高まりに中期を中心とした方形周溝墓群や土壌墓群が検出されるなど、城山遺跡は墓域であることが明らかとなった。また中世においては、3～5次調査で幅5.0～6.0m、深さ1.0mの方形に巡ると考えられる濠が検出された。出土遺物から15世紀後半～16世紀代と考えら

れ、小字名に「城山」と残るように、中世の豪族居館であった可能性が高い。城山遺跡は、7回を越える調査により、弥生時代～中世に至る一大複合遺構であることが明らかとなった。

2. 調査経緯

浜松市若林町のスズキ株式会社所有地において、社員寮の新設工事が計画され、文化財保護法第57条の2第1項による通知が、静岡県教育委員会宛に提出された（平成16年11月18日付）。事業地は、城山遺跡が及んでいる範囲に位置していたため、事業計画と照合したところ、導入路となる橋の橋脚及び建物の東側における基礎工事が埋蔵文化財確認面（遺構面）より下にまで及ぶと判断された。事業主体のスズキ株式会社、施工業者の株式会社林工組、浜松市教育委員会の3者で埋蔵文化財の取扱いについて協議を行った結果、発掘調査は工事に支障がでないよう工事工程に合わせて行い、必要経費はスズキ株式会社が負担することとなった。

発掘調査は2004年12月9日に橋脚基礎部分を4ヶ所行い、翌2005年2月2日に建物の東側基礎部分を行った（第2図）。

3. 調査の成果

調査は、2ヶ所に新設される橋の橋脚（1～4 G）と鉄筋コンクリート造5階建社員寮の東側基礎部分（5 G）について行った（第2図）。

1 Gにおいては、盛土と攪乱層を除去すると、すぐ基盤層のベース砂層（砂丘砂層）が現われた。攪乱は、以前に行われたフェンス基礎工事によるもので、ベース砂層の上面は本来もっと高い位置にあったと考えられる。遺構は1 Gの南端と北側の2ヶ所（a・b地点）で検出された。ともに第3図で10層とした暗褐色砂質土層を覆土としたもので、弥生時代の溝もしくは土塋と考えられるものである。b地点から弥生土器の小片が1点検出された。

道を挟んで東側で行った5次B調査区では、方形周溝墓と土塋墓、下水管埋没に伴って調査した4 Gの東側でも方形周溝墓が検出されている。今回の調査区は、弥生時代中期中葉～後葉の墓域の一角と考えられる（第1・7図）。

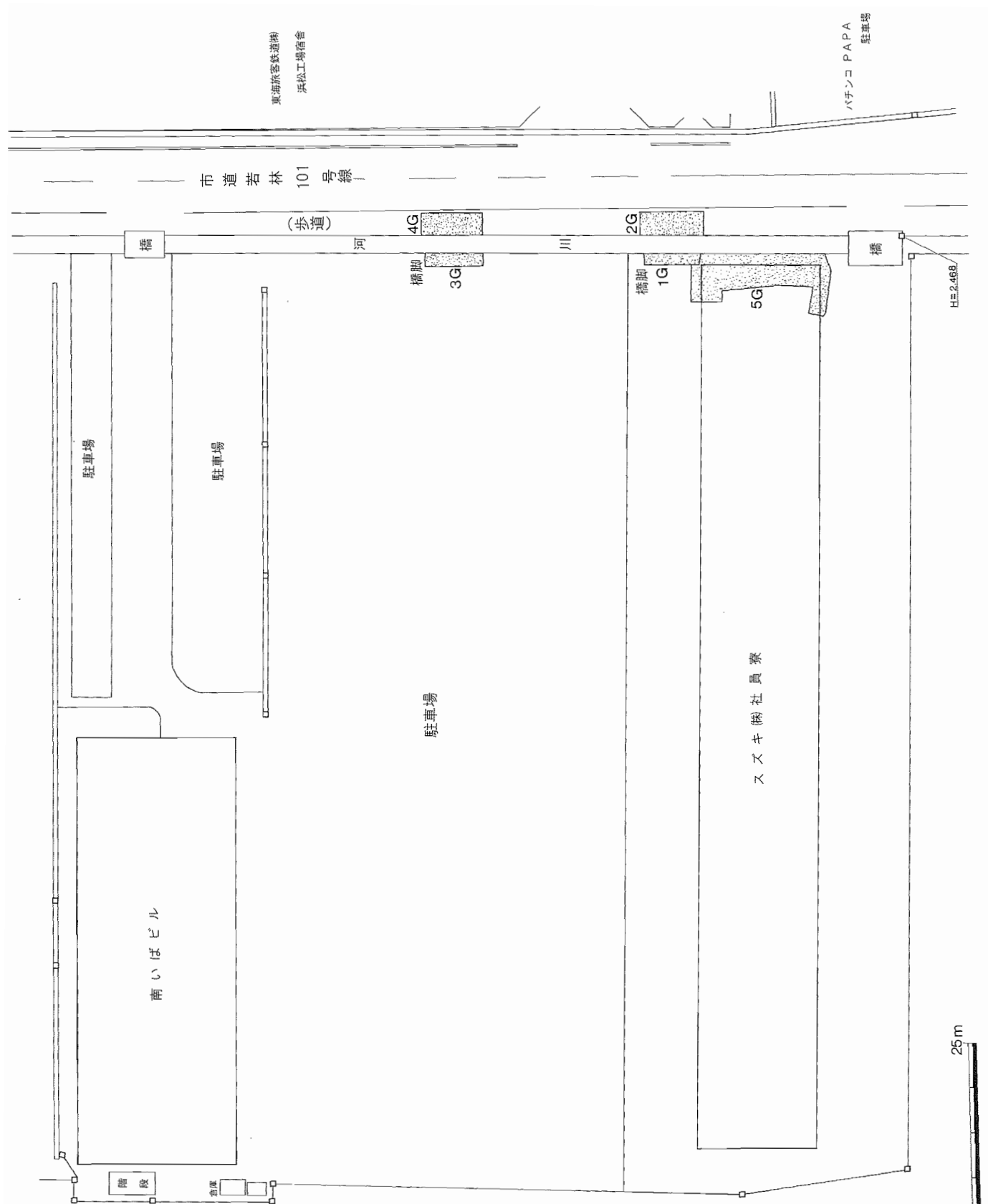
3 Gでは、1 Gと同じようにフェンス基礎工事により基盤層上面（11層）まで攪乱が及んでいた。そのため旧表土層や包含層は検出されなかった。検出された基盤砂層の上面の高さは、a・bと同じく、標高1.0m前後である。出土遺物は、7～8世紀の土師器小片が出土したにすぎない。

2 Gは川を挟んで1 Gの東側橋脚基礎、4 Gは3 Gの東側基礎部分の調査区である。2 Gと4 Gは市道若林101号線に伴う西側歩道部分にあたる。ともに下水管が埋設されていたため、攪乱は地表下2.0m（標高0.4m）に及んでいた。なお下水管は直径0.45mで、管上面が地表下1.5mである。

5 Gは、建物の東壁基礎部分にあたる。基礎はφ0.6mのPHCパイプを打ち込み、掘削はGL－1.53m、地中梁はGL－1.3mに及ぶ。基礎工事が標高約1.0m以下に及ぶことにより、包含層や遺構面が掘削される恐れがある建物の東側部分（5 G）について本調査を行った。

調査は、盛土と攪乱層を重機により除去した後、人力で精査作業を行った。A～D地点（第3図右）では、標高1.5mあたりで褐色砂層（2層）の上面が検出された。当初は基盤砂層と思われたが、締まりがなく、また古代～中世の土器が含まれていたことから、第3図の地点表示（A～F）で深掘りを試みた。その結果、2層は中世末の盛土であることが判明した。南東部の砂丘の高まりを削って、低い所に盛土が行われたものと想像される。

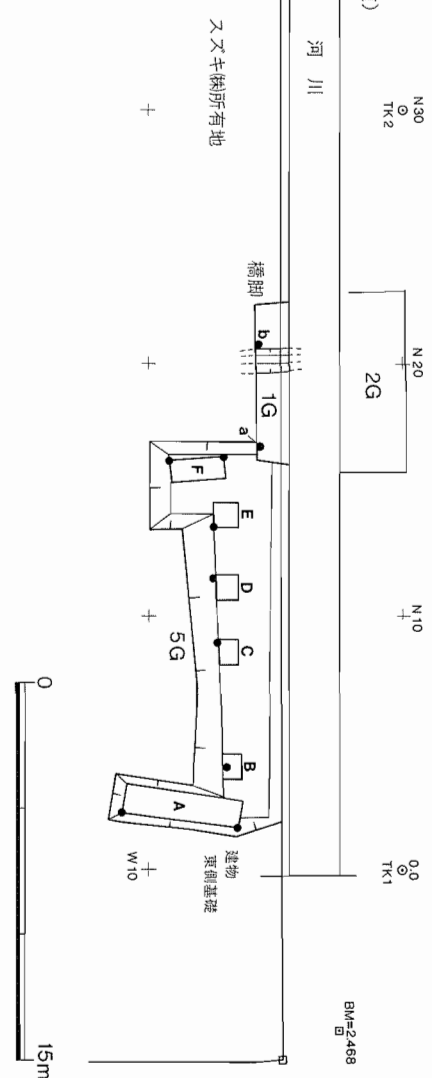
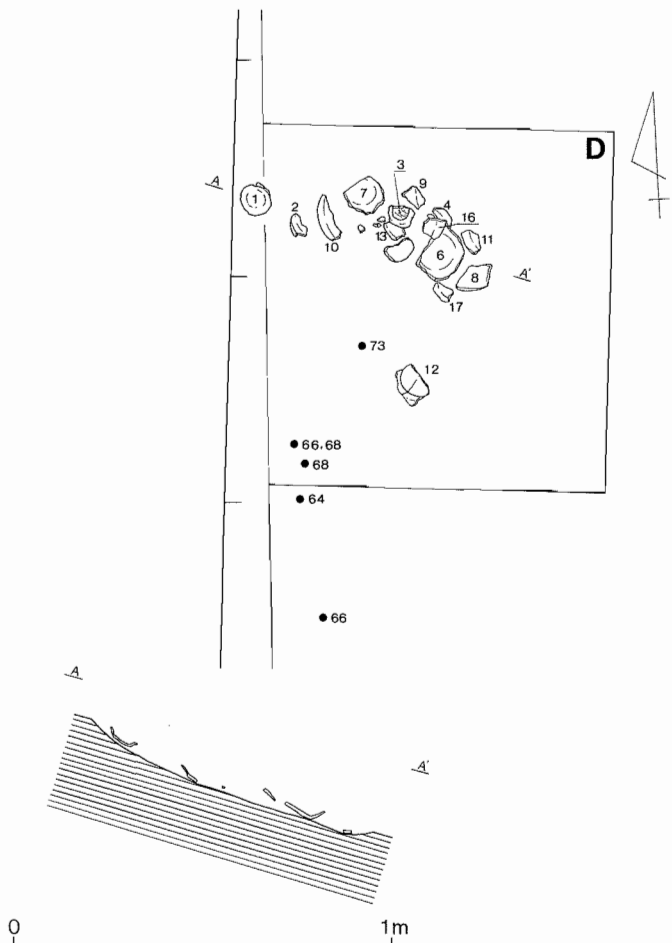
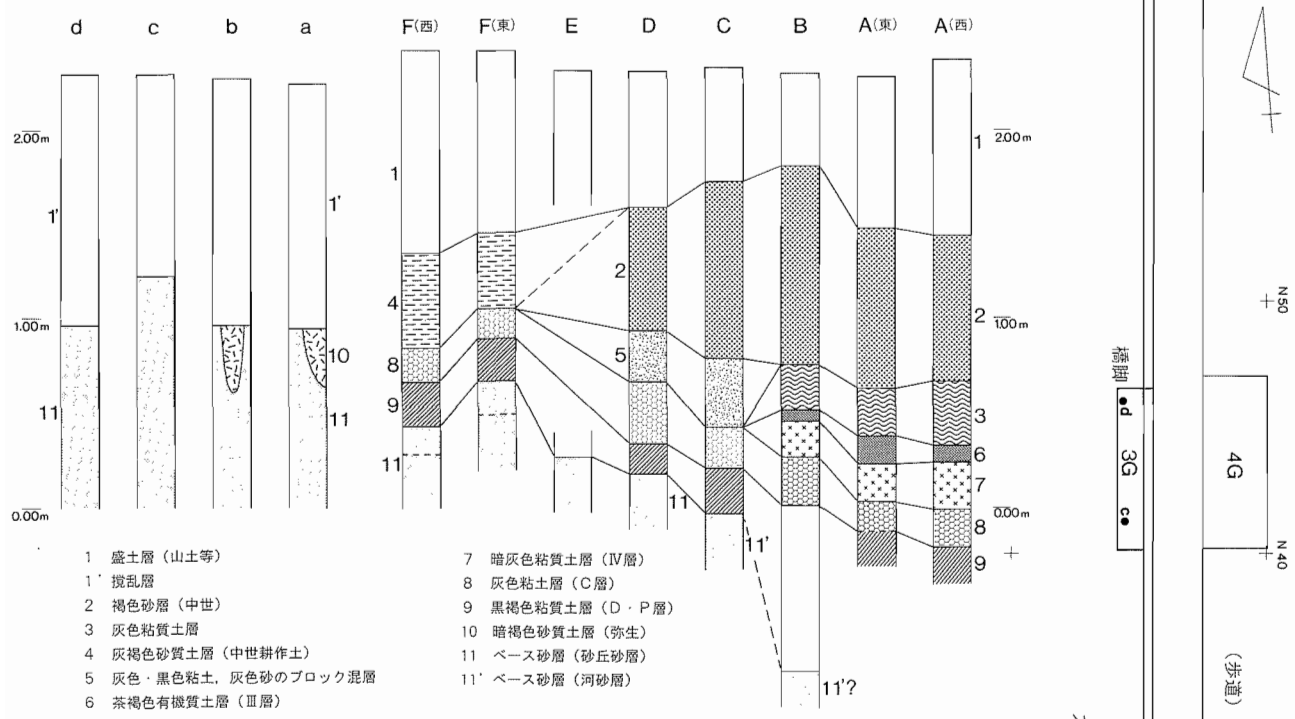
2層の下は、3層の灰色粘土層、6層の茶褐色有機質土層、7層の暗灰色粘質土層、8層の灰色粘



凡 例

1. 標高値は全て海拔を示す。
2. 調査区の位置出しは既存建造物と境界杭から。

第2図 調査位置図



第3図 調査区全体図・土層図・土器集中遺構実測図

土層、9層の黒褐色粘質土層と続く。伊場遺跡の発掘調査では6層をⅢ層、7層をⅣ層、8層をC層、9層をD層もしくはピート層と呼んだ。深掘りによりA・B地点の下層は湿地性の堆積層であることが確認された。B地点の7層からは7世紀の土器が、6層からは中世の箸と板材が出土した。

B・C地点での基盤層は、雲母を多く含む河砂層であった。古墳時代以前に、砂丘の一部が削られ、そこに洪水等による河砂層が流入したと想像される。

C・D地点ではA・B地点の3・6・7層にかわり、5層とした中世の造成土と考えられる灰色と黒色粘土・灰色砂のブロック混層が存在した。5層は、3・4次と5次調査で検出された中世の濠を埋めていた土層に似る。5層の下には8・9層（C・D・P層）がある。5層下部から8層上部にかけて、7～8世紀の土器が多く出土した。

D地点では、基盤層に砂丘砂層の11層が確認された。砂丘の高まりから湿地へ移行する地点である。

F地点は褐色砂層の2層のかわりに、4層とした中世の耕作層と考えられる灰褐色砂質土層があり、その下に8層（C層）と9層（D・P層）が存在した。ここでの8層はやや暗い灰色層で、6世紀末の須恵器坏蓋（19）を出土した。D・F地点間では、4・5層下部から8層上部にかけて、6～8世紀の土器が多数検出された。9層は砂質が強く、10層に近い土層となっている。遺物は出土していないが、弥生時代の包含層の可能性はある。基盤層は11層の砂丘砂層であり、西方向へ傾斜している。

5Gでは北東部が最も高く、西と南へ向かって低くなっている。5Gでは明確な遺構は確認されなかったが、D地点においては2層の下部より、土器が集中して出土した（土器集中遺構：第3図下段）。出土状態を見ると掘り込みはわずかに存在するかもしれないが、平面的な観察及び堆積土層の状況からは、掘り方は認識できなかった。出土遺物は大小の差はあるが、いずれもロクロかわらけである（第4図）。これらのかわらけは、何らかの理由で一括投棄された状況を示していると思われる。

4. 出土遺物

土器集中遺構 出土遺物はいずれもかわらけで、第4図1～17に示した。またやや浮いた状態で出土した第6図66・68・73もこれらに含まれていた可能性が高い。

1～5と73は、口径7.0～8.0cm代、器高約2.0cmの大きさで、小皿状のロクロかわらけである。2はロクロ回転を使って糸切りされているが、他は静止状態で行われている。3と4は口唇部外面が沈線状に窪む。胎土は緻密で、色は薄い明茶色を呈する。4の底部には、黒斑が付いている。

6～17・68は、大型で浅い碗形をしたロクロかわらけである。口径は多くが14.0～15.0cm代であるが、12.0cm代の14・15・68もある。糸切りは、ロクロが静止状態で行われている。6・9は、側面にまで糸の痕跡が付いている。口縁部は、少し内湾化する特徴がある。胎土は緻密で、薄い明茶色を呈し、一部はピンク色に近いものもある。8・10・12・13には、黒斑が付いている。

66は大型の非ロクロかわらけである。口径は14.3cm、器高は2.5cmである。口縁部は外反し、内面は板ナデ、外面は下半がナデ・オサエ、上半がヨコナデで仕上げられている。胎土は緻密であるが、赤茶色を呈している。66は、一般的に京都系のかかわらけとされているものである。

66は15世紀末葉に遡る可能性はあるが、他のかかわらけはいずれも16世紀代と考えられる。

弥生土器 弥生土器は、75と76の2例が出土しただけである。周辺から検出されている方形周溝墓や土壙墓はいずれも中期中葉～後葉であるのに対し、2例とも後期の可能性の高い土器片である。75は壺頸部の破片で、櫛刺突列点文が施された頸部突帯をもつ。76はやや上底に作られた壺底で、内面は板ナデで調整されている。

6～8世紀の須恵器 第5図18～46が当期の須恵器である。18～23が坏蓋、24～28が坏身で、6世紀末葉～7世紀中葉と考えられるものである。18は天井部と口縁部に稜をもち、さらにその上に段がつ

いている。これは、東山窯で焼成された須恵器坏蓋の特徴である。22は、外面に沈線が入れられている。口径の大きな18～20・24は6世紀に遡る可能性が高い。25は7世紀初頭、他は7世紀中葉と考えられる。

29～33は8世紀代の摘み蓋、34～36は8世紀前半～中葉の有台坏身である。37と38は口径が12.0cm前後の8世紀後半の箱形坏身である。

39は、8世紀後半の大型で有台の箱形坏身である。40は8世紀代の無台碗、41は8世紀後半の有台皿のようである。42は7世紀代の高坏、脚付壺、高盤などの脚部と考えられるものである。43は7世紀代の鉢の可能性もある。45と46は7世紀代の甕であり、45の口縁部外面には櫛刺突文が施されている。46の外面には平行叩きの後、沈線が2条施されている。内面には薄い同心円叩きが残る。

6～9世紀の土師器 第5図47～49、第6図53～65に当期の土師器を図示した。56～58が皿、47・48・59が鉢、53が小型甕、55・61～65が甕、60が台付鍋、54が壺、49が甑である。

56は内面に斜格子状の暗文が施され、外面がミガキ調整された皿である。赤彩は施されていないが、ピンク色を呈している。57は、高盤の可能性もある。58は全面赤彩された小型の皿である。3点とも8世紀前葉と考えられる。

47・48・59は、大きさや形は異なるが鉢もしくは碗であり、7～8世紀代のものである。53は7世紀代の小型甕の口縁部である。55・61・62は口縁部の開きが小さいことから、7世紀代の普通サイズの甕である。いずれもハケ仕上げで、口縁部周辺にヨコナデ調整が加えられている。61には外面に煤、内面に焦げが付いている。

63はやや大型の甕で、7世紀後半～8世紀前葉、60は同時期の台付鍋と考えられる。63の外面には煤が付着している。これらもハケ仕上げで、口縁部だけがヨコナデ調整されている。

54は口径が小さい割に口縁部が長いことから、壺の可能性が高い。口縁部の形態から7世紀代と考えられる。49は7～8世紀代の甑もしくは把手付鉢の把手である。

64は板ナデとナデで仕上げられた、乳白色をした甕の口縁部である。65は断面コの字形の口縁部が退化したもので、ハケと板ナデで仕上げられている。この2例は、9世紀代から10世紀まで見られるものである。

灰釉陶器 灰釉陶器は、10世紀のO-53号窯式に比定される碗が3点検出されただけである。50が口縁部片、51と52が底部片である。51と52は爪形の高台が付き、底部に糸切りを残す。内面には重ね焼の痕跡がある。

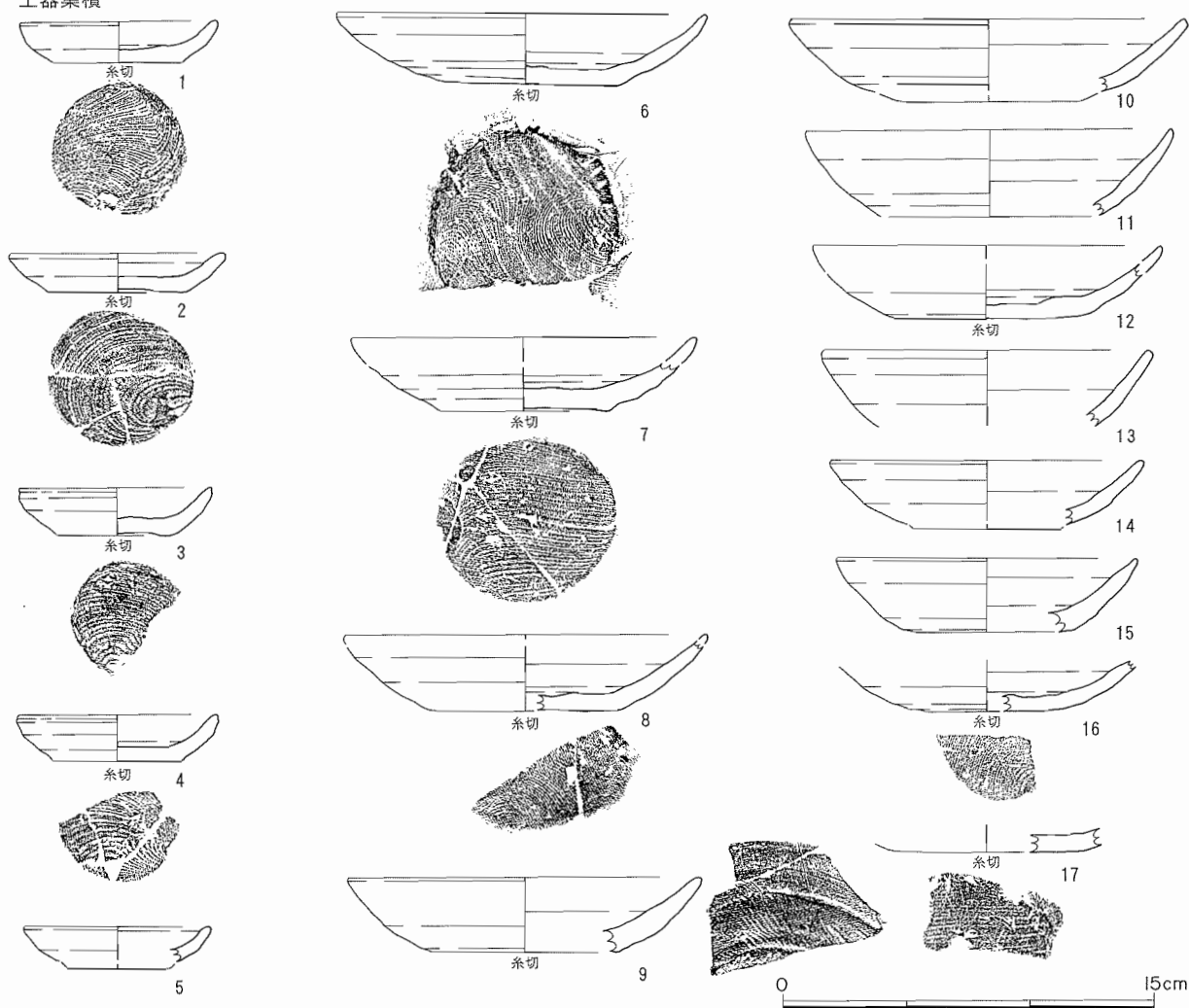
戦国時代の土器 D地点で検出された土器集中遺構のかわらけについては前述した。それ以外のものについては、第6図67・69～72・74に示した。

67は口径12.0cm、器高2.0cmの非ロクロかわらけで、外面に円形竹管文が施されている。口縁部は外反しているが、口唇部近くではやや内湾気味に作られている。いわゆる京都系のかかわらけで、乳白色を呈する。円形竹管文を施した京都系かわらけには、城山遺跡下水調査区（浜松市2001）、5次B調査区（浜松市1993）からの出土例がある。いずれも近接した調査区ではあるが、相当数存在したかわらけと想像される。形態と法量から16世紀前半代と推定される。69～72は、大型で浅い碗形をした16世紀代のロクロかわらけである。これらは、土器集中遺構から出土した例とほとんど変わらない。

74は、くの字口縁部の内耳鍋である。内側には耳がとれた痕跡がある。年代は15世紀後葉～16世紀前半である。

木製品 木製品は、2点が出土した。77はヒノキ材を加工して、先端を尖らせた箸と考えられるものである。上部は、焼けて欠損している。78はヒノキの薄い板材であるが、用途については不明である。ともにB地点の6層から出土しており、中世の遺物と考えられる。

土器集積



第4図 出土遺物実測図1 (土器集中遺構)

遺物出土位置一覧 (全て5Gから出土)

D地点土器集中遺構——16Cかわらけ……1・17・66・68・73

5G南半2層——7・8C須恵器…23・28・39・45

7C土師器……55・61

10C灰釉陶器……50・51

16C中世土師器…67・69～72・74

5G北側4・5・8層——6・8C須恵器…18・20～22・24～26・29・30・33・36～38・40～42

7・8C土師器…48・49・53・54

10C灰釉陶器……52

弥生土器……75

B地点7層——7C須恵器……44・46

7C土師器……59・62

B地点6層——中世木製品……77・78

C地点5層下～8層——7・8C須恵器…27・31・32・34・43

7・8C土師器…47・56～58・60・63

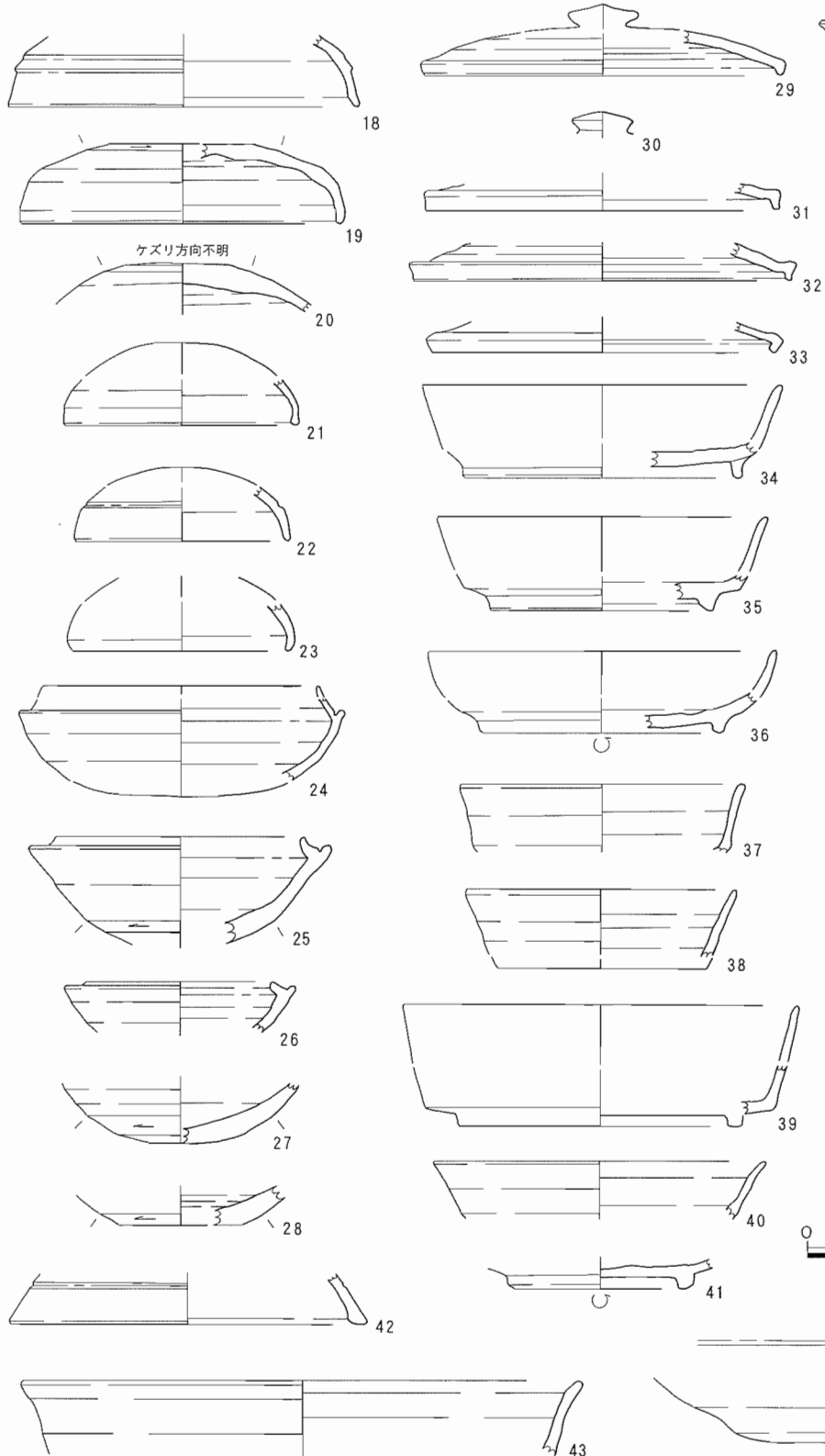
弥生土器……76

D地点5層下～8層——8C須恵器……35

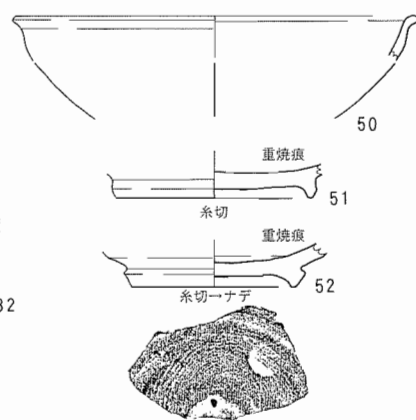
D地点2層下部——9C土師器……64・65

F地点8層——6C須恵器……19

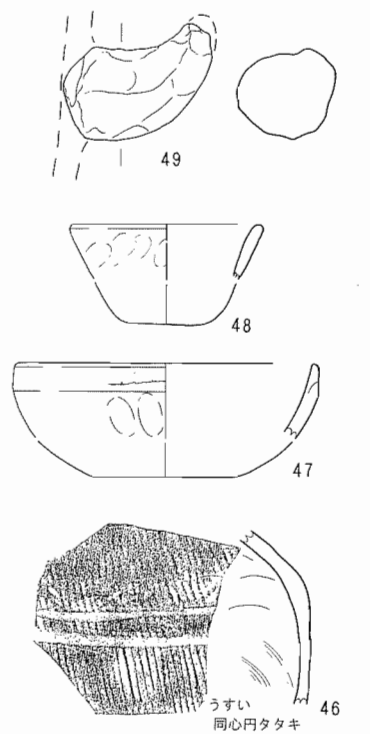
須恵器



灰釉陶器

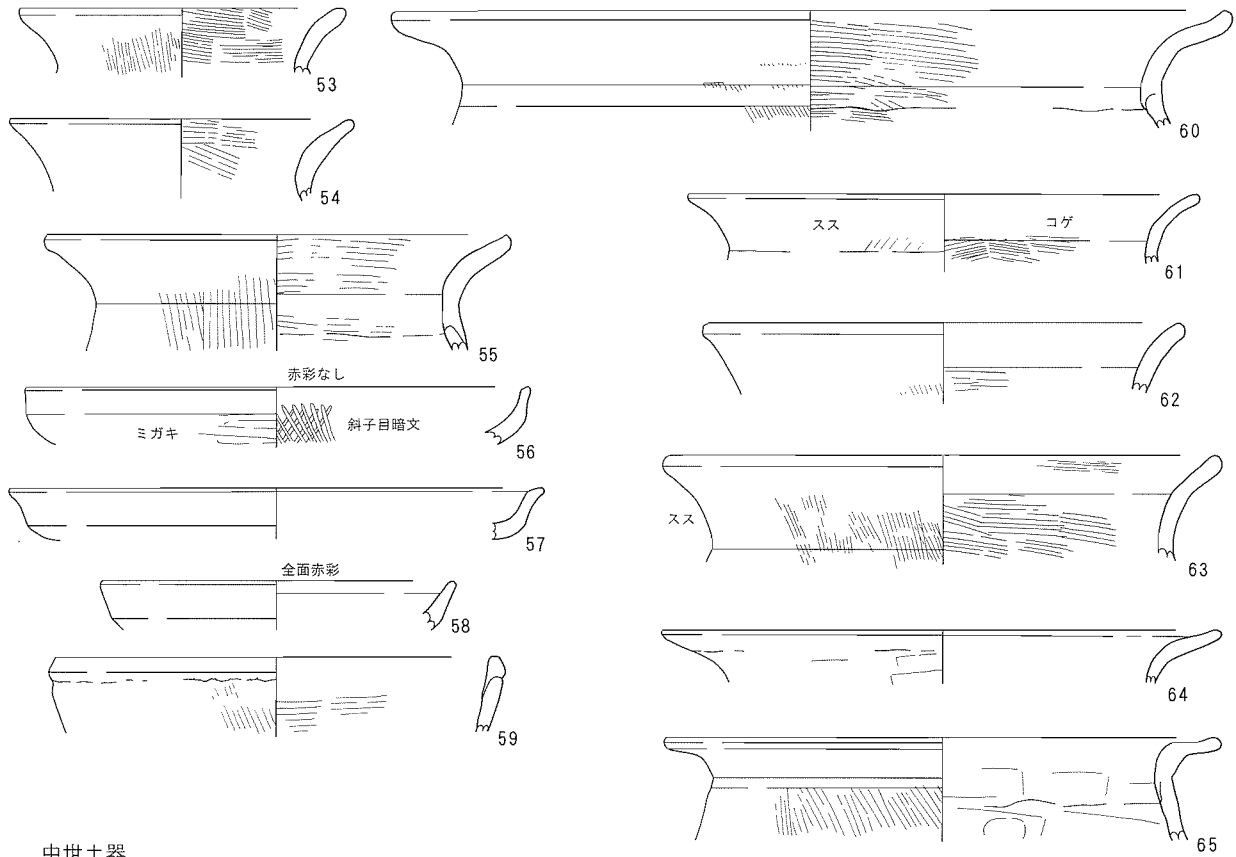


土師器

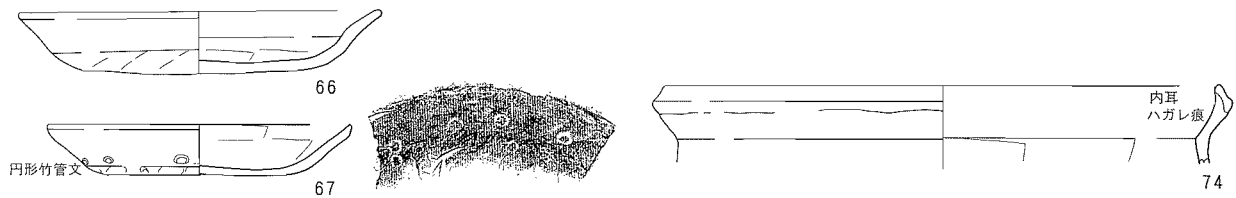


第5図 出土遺物実測図2 (須恵器・土師器・灰釉陶器)

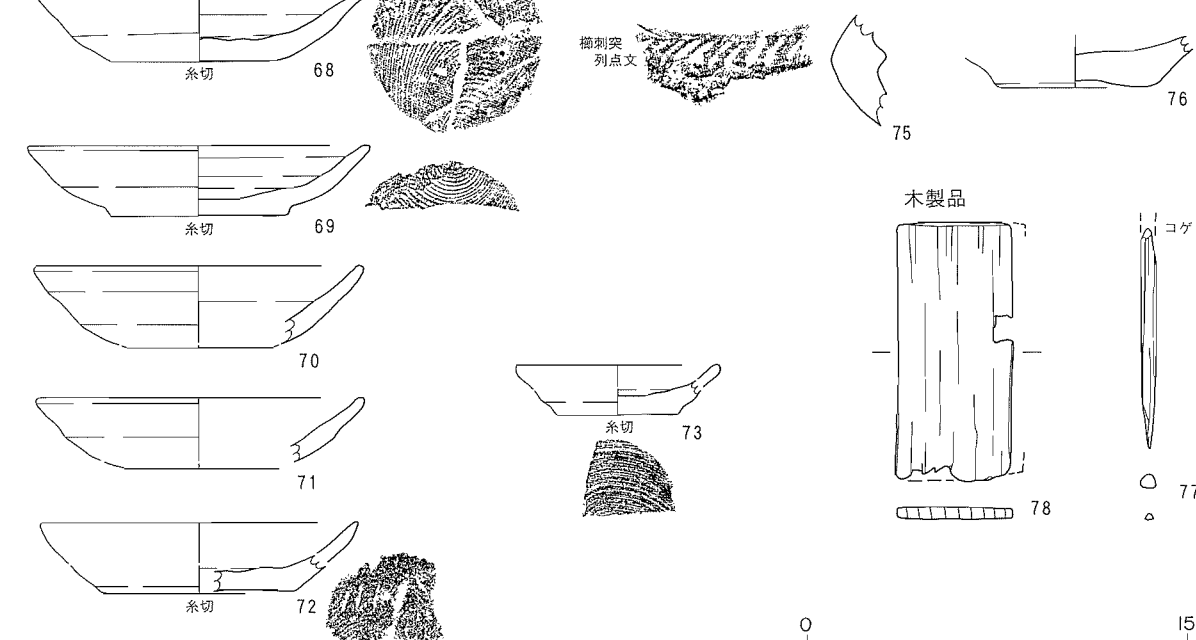
土師器



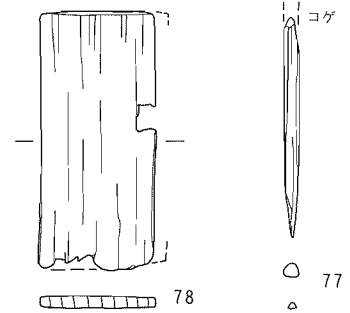
中世土器



弥生土器



木製品



第6図 出土遺物実測図3 (土師器・中世土器・弥生土器・木製品)

0 15cm

5. まとめ

今回の調査では弥生時代と戦国時代の遺構が検出された。出土遺物には弥生時代、戦国時代の他、7～8世紀の遺物も多く出土した。

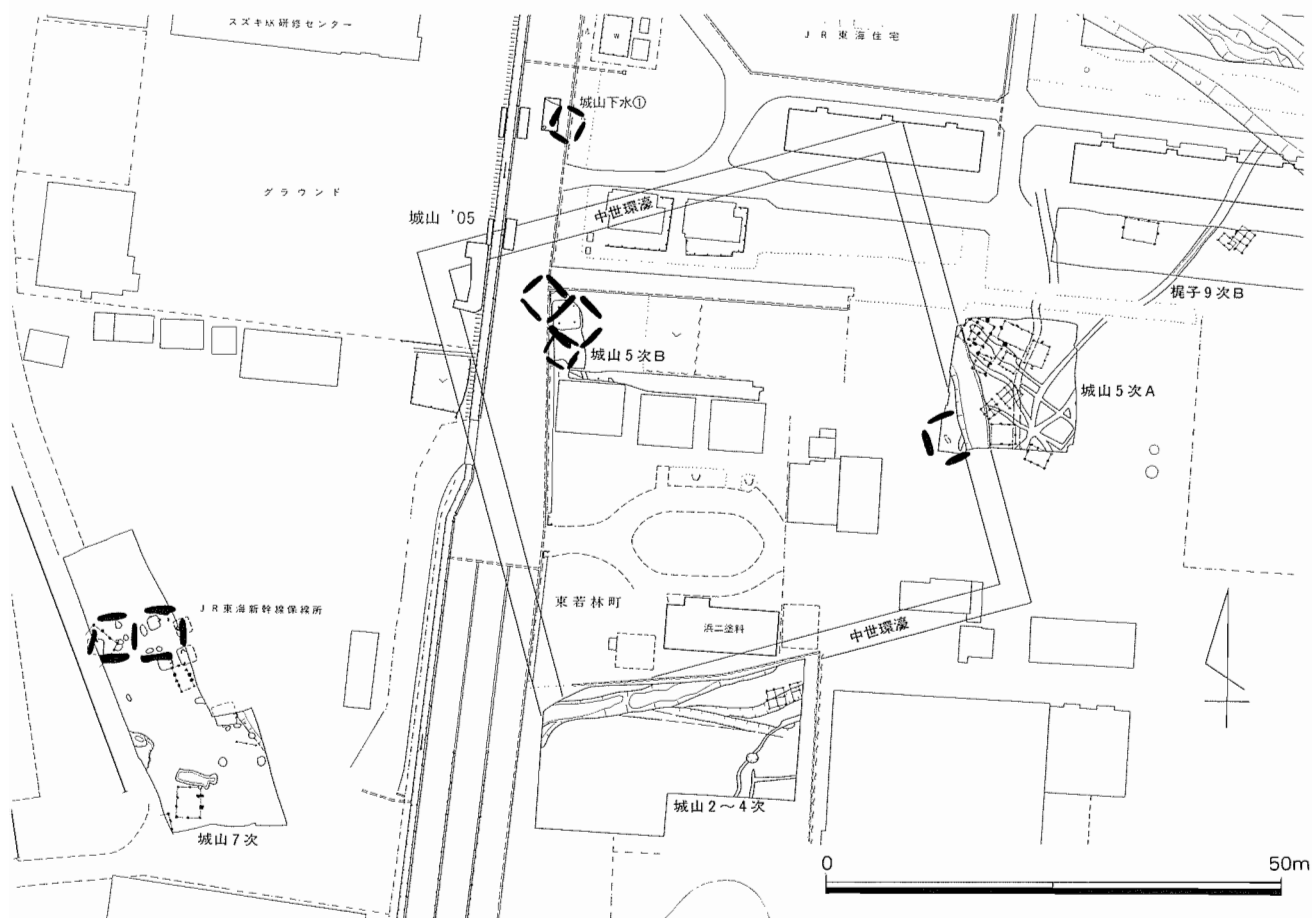
弥生時代 弥生時代については、調査区は中期中葉～後葉の墓域内にあり、1 Gでは方形周溝墓の溝もしくは土壇を検出することができた。中期に遡る明確な遺物は検出されなかったが、5 Gからは後期の土器が2点出土した。

7～8世紀 7～8世紀代の出土遺物は中世の土器とともに多く、従来の調査で明らかのように、城山遺跡が最も盛行した段階のものである。5 Gは第1図の埋没地形図に示すように、当時の窪地（湿地）であった可能性が高く、残念ながら遺構は検出されなかった。

戦国時代 戦国時代の遺構には土器集中遺構があり、出土遺物も最も多い。城山遺跡が古代に次いで盛行する時期である。2～4次調査と5次A調査区では、幅5.0～6.0m、深さ1.0mの濠と考えられる溝が検出され、15世紀後半～16世紀代の遺物が多く出土した。溝は方形に巡る可能性があり、また地名が館の名残と考えられる「城山」であること、さらに持仏堂の存在を推定させる「大日如来」と記された木簡が出土していることから、中世豪族の居館ではないかと推定されている。

今回の調査区1・3・5 Gは一町四方で想定した方形環濠のちょうど北西角にあたる。想定した濠内に入るが、残念ながら明確に濠を認めることはできなかった。今回の調査により濠の規模や、それがどのように巡るのか再検討を要することとなった。

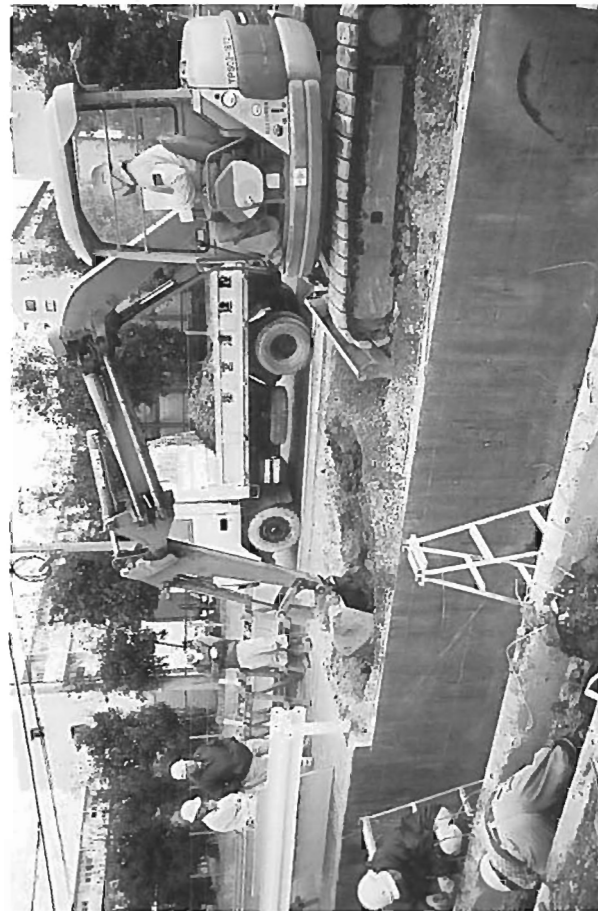
しかし5 GのC・D地点には、かつての調査で濠を埋めていたのと同じブロック混層が存在したこと、また砂丘の高まりから湿地へ移行する地点であることから、方形環濠が近くを通過していた可能性もまだ捨てきれない。今後の調査に期待したい。



第7図 城山遺跡の方形環濠推定図



A: 橋脚部 1G 発掘調査 (北から)



B: 橋脚部 2G 重機掘削工事 (西から)



C: 橋脚部 3G 発掘調査 (北から)



D: 建物東壁基礎部 5G 発掘調査 (北から)



A：建物東壁基礎部 5G 発掘調査（南から）



B：建物東壁基礎部 5G 深掘状況（西から）



C：5G F地点 北壁土層（南から）



D：5G D地点 土器集中遺構（東から）

写真図版3



かわらけ集合写真



78

77

遺跡名	調査名称	調査期間	調査面積	原因	調査主体
城山遺跡		1948年8月		ボーリングによる探査	國學院大學
	1次	1949年12月1日～10日		試掘調査	國學院大學
	2次	1977年11月18日～12月26日	400㎡	埋立工事に先立つ範囲確認調査	可美村教育委員会
	3次	1980年1月8日～3月30日	1000㎡	埋立工事	可美村教育委員会
	4次	1980年7月21日～9月23日	700㎡	埋立工事	可美村教育委員会
	5次	1992年4月～6月・11月	800㎡	遊戯場建設	(財)浜松市文化協会
	6次	1995年8月1日～11月30日	1400㎡	社員寮建設工事	(財)浜松市文化協会
	7次	1999年1月20日～3月25日	1340㎡	新幹線検修庫新設工事	(財)浜松市文化協会
	市下水	2000年12月4日～8日	88㎡	浜松市下水道工事	浜松市教育委員会
	2004	2004年7月20・21日	125㎡	JR東海敷地内検修庫・検修庫内ピット新設工事	(財)浜松市文化協会
	2005	2004年12月9日・2005年2月2日	82㎡	社員寮新築工事	浜松市教育委員会

城山遺跡発掘調査一覧表

遺跡名	調査名称	発行者	発行年・月	報告書名
城山遺跡	1次	浜松市役所	1953・9	『伊場遺跡―西遠地方に於ける低地性遺跡の研究―』
	2次	可美村教育委員会	1978	『浜名郡可美村城山遺跡範囲確認調査概報』
	3・4次	可美村教育委員会	1981・3	『城山遺跡発掘調査報告書』
	5次	(財)浜松市文化協会	1993・12	『城山遺跡Ⅴ』
	6次	(財)浜松市文化協会	1997・3	『城山遺跡Ⅵ』
	7次	(財)浜松市文化協会	2000・3	『城山遺跡Ⅶ』
	市下水	浜松市教育委員会	2001・3	『城山遺跡(市下水)』
	2004	(財)浜松市文化協会	2004・9	『城山遺跡2004』
	2005	浜松市教育委員会	2005・3	『城山遺跡(2005)』

城山遺跡関係報告書一覧表

報告書抄録

書名（ふりがな）		城山遺跡(2005)（しろやまいせき・2005）						
編 著 者 名		鈴木敏則						
編 集 機 関		浜松市博物館 〒432-8018 浜松市蛸塚4丁目22-1 053(456)2208						
発 行 機 関		浜松市教育委員会 〒430-0917 浜松市常磐町306-5イーステージ 浜松オフィス棟5F						
発 行 年 月 日		2005年3月25日						
ふ り が な 所 収 遺 跡 名	ふ り が な 所 在 地	コ ー ド		北 緯 ° ' "	東 経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しろやまいせき 城 山 遺 跡	しずおかけんはままつし 静岡県浜松市 わかばやしちょう 若林町・ ひがしわかばやしちょう 東若林町・ みなみいばちょう 南伊場町地内	22202	22-1	34度 41分 28秒	137度 42分 32秒	2004年 12月9日 ・ 2005年 2月2日	82㎡	社員寮 新築工事
所収遺跡名	種 別	主 な 時 代		主 な 遺 構		主 な 遺 物	特 記 事 項	
城 山 遺 跡	墳 墓	弥生時代中期		方形周溝墓？		弥生土器片	方形周溝墓群の一角	
	官 衙	飛鳥～平安時代		包含層		須恵器・灰釉陶器 ・土師器	数智郡衙周辺部	
	集 落	中世		土器集中遺構		かわらけ・内耳鍋	中世居館周辺部	



しろやまいせき
城山遺跡(2005)
2005年3月25日

発行 浜松市教育委員会
編集 浜松市博物館 〒432-8018
静岡県浜松市蛸塚4丁目22-1
TEL 053-456-2208
印刷 中部印刷株式会社